



筑紫女学園大学リポジット

Perspectives of Tradition and Innovation in "The Highwayman" : Alfred Noyes' Gothic Outlaw Ballad

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮原, 牧子, MIYAHARA, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/470

“The Highwayman” に見る伝統の継承とその更新

—Alfred Noyes のゴシック・アウトロー・バラッド詩—

宮 原 牧 子

Perspectives of Tradition and Innovation in “The Highwayman”

—Alfred Noyes’ Gothic Outlaw Ballad—

Makiko MIYAHARA

1994年、英国で National Poetry Day が制定された。翌年、この日を祝う目的で BBC 主催の全国電話投票が行われ、国民が好きな詩100選が決定した。1996年、この100篇の詩は *The Nation’s Favorite Poems* として出版され、現在でも Amazon UK の詩集売上ランキング上位に位置し続けている。100編の作品の選定をめぐっては、これまで様々なメディアを通して反論がなされてきた。¹しかし選ばれた作品はそのほとんどが、英国での中等以下の学校教育の中で教科書や教師によって教えられる作品であり、さらに小説・映画・ドラマ・歌に引用されることによって、人々の記憶に留まっているものばかりである。つまり、いずれの詩も、読書という行為が人々の一番の娯楽でなくなった現代、一般の読者が一番慣れ親しんでいるメディアを通して定着し、生活の中に浸透したもののばかりなのである。

さて、この100篇の中には、丁度10篇のバラッド詩が含まれている。

- 2位 The Lady of Shalott (Alfred, Lord Tennyson, 1809-92)
- 15位 The Highwayman (Alfred Noyes, 1880-1958)
- 23位 Sea-Fever (John Masefield, 1878-1967)
- 27位 Cargoes (John Masefield, 1878-1967)
- 28位 Jabberwocky (Lewis Carroll, 1832-98)
- 29位 The Rime of the Ancient Mariner (S. T. Coleridge, 1772-1834)
- 54位 The Ballad of Reading Gaol (Oscar Wilde, 1854-1900)
- 59位 A Red, Red Rose (Robert Burns, 1759-96)
- 74位 The Charge of the Light Brigade (Alfred, Lord Tennyson, 1809-92)
- 88位 The Ruined Maid (Thomas Hardy, 1840-1928)

10作品の作者である8人の詩人のうち、おそらくこの中で一番日本に知られていないのは15位の Alfred Noyes であろうが、1906年に発表されたノイズのバラッド詩 “The Highwayman” (以下、

「^{おいはぎ}追剥」と翻訳)は、英国の教育現場においても非常に人気が高く、その影響であろうか、動画投稿サイト Youtube にアップされている「追剥」関連の多数の動画の中には、小学生の朗読と絵で作品を紹介するものまである。²恋愛とホラーという、一般の読者にとっておそらく最も親しみやすいテーマの作品であることはこの詩の人気理由の一つであろうが、この詩を英国のバラッドの系譜上に見ると、作品に単なる娯楽作品ではない位置づけができる。「追剥」は現代的な要素を持ちつつも、英国に脈々と続くアウトロー文学の系譜上にあり、さらに19世紀のバラッド詩の流れを汲んだ極めて伝統的な作品でもある。以下、ノイズがいかにバラッドの伝統を継承し、また新しい感覚をどう盛り込んでいったのかについて検証していく。

まず、英国における詩人ノイズの評価についてまとめておきたい。1916年に書かれた *A History of English Literature* には、以下のような紹介がされている。

Mr. Alfred Noyes (born 1880) is a refreshingly true lyric poet and balladist, and Mr. John Masefield has daringly enlarged the field of poetry by frank but very sincere treatment of extremely realistic subjects. But none of these authors can yet be termed great.³

まだ偉大な作家とは言い難いという辛口なコメントではあるが、共に評価の低いメイスフィールドが後に桂冠詩人に任ぜられたことを考え合わせるならば、この評価は詩人たちの将来性を見込んでいない指摘であると言えるだろう。ここで、バラッド詩を5篇しか書いていないノイズを“balladist”と称するのは、当時すでに出版されていた「追剥」の人気によるものであり、発表当初からこの作品への注目度が高かったことを示す証拠と読める。1930年に出版された *Alfred Noyes* の著者 Walter Jerrold は、ノイズを

a poet who has lent himself to no vagaries of the moment, but has been content to develop the great tradition of the great poets who have made the English language the vehicle of the world's richest body of poetry⁴

と極めて高く評価している。「追剥」を読むに当たり注目したいのは、ノイズが伝統的であり、さらにその伝統を発展させたという評価である。ジェロルドは特に、19世紀の詩人たちがノイズに与えた影響についてこのような指摘をしているのであるが、これは、この作品の斬新さに意識を奪われる読者にとって意外な評価と言えるだろう。

「追剥」は、名も無い追剥とその恋人 Bess の物語である。必ず戻ってくるという言葉を残して出かけていった追剥を待ちわびるベスの元に、王の兵隊たちがやって来る。兵隊に待ち伏せされる恋人に危険を知らせるため、ベスはライフルで自らの命を絶つ。その銃声で命拾いした追剥であったが、街で恋人が死んだことを知り、戻ってきたところを兵隊たちに撃ち殺される。

The wind was a torrent of darkness among the gusty trees.
 The moon was a ghostly galleon tossed upon cloudy seas.
 The road was a ribbon of moonlight over the purple moor,
 And the highwayman came riding —
 Riding — riding —
 The highwayman came riding, up to the old inn-door. (Part 1, st. 1)⁵

1行目は、テニソンのバラッド詩“The Sisters”のリフレイン部分、‘The wind is blowing in turret and tree.’ (l.3)⁶を彷彿とさせる。また、2行目は、ノイズと同時代に活躍したメイスフィールドの海洋バラッド詩の表現を連想させる。同じく2行目の‘ghostly galleon’という音は、1行目の‘gusty’という単語とも重なり、不吉な予感を読者に持たせる。ジェロルドは、ノイズを‘lover of music and color’⁷とも評価しているが、3行目の月光に照らされ紫色を帯びる荒野の豊かな色彩、さらに後半の3行のリズムの良さには、この評価の正当性が感じられる。

He'd a French cocked-hat on his forehead, a bunch of lace at his chin,
 A coat of the claret velvet, and breeches of brown doe-skin.
 They fitted with never a wrinkle. His boots were up to the thigh.
 And he rode with a jewelled twinkle,
 His pistol butts a-twinkle,
 His rapier hilt a-twinkle, under the jewelled sky. (Part 1, st. 2)

このような、いわゆるアウトロー・ファッションは、Dick Turpin (1705-39) や Claude Duval (1643-70) といったアウトローたちに特有のものである。*The Outlaw Legend* には、ノイズの追剥は19世紀に多く書かれた少年少女向けの小説に登場するアウトロー、クロード・デュバルの系統であるという指摘がある。

Duval continues as a hero of *Boys' Own* historical adventures, gallantly saluting his victims in his fine brocade and three-cornered hat while astride a magnificent steed. This is also the image of the highwayman represented in Alfred Noyes' nineteenth-century poem ‘The Highwayman’, with its moonlit night, moor, old inn door and other accoutrements of romance. The romantic highwayman has continued to interest producers and purveyors of popular fictions in the twentieth century. A number of feature films based on the highwayman as hero have been released, and the highwayman has featured strongly in certain genres of juvenile literature.⁸

イギリス文学に登場するさまざまなアウトローたちの中でも、ノイズの追剥は、ロビン・フッドな

どの中世に誕生したアウトローではなく、19世紀に人気を博したダイムノベルに多く取り上げられた17～18世紀のアウトローたちをモデルにした作品である。ダイムノベルに登場するアウトローたちの中でも特に人気のあったクロード・デュバルは伊達男の代名詞ともいべき人物で、そのファッションと容姿は女性にとっても人気があったと言われており、デュバルの墓碑銘には‘Here lies Duvall, Reader, if male thou art, / Look to thy purse. If female, to thy heart’ という言葉が残っているほどである。

しかし、ノイズ自身は自伝の中で、自分が「追剥」を書くにあたり影響を受けたのは、少年時代に読んだ William Harrison Ainsworth の *Rookwood* (1834) であると述べている。これは、ルックウッドと呼ばれる荘園の相続をめぐる物語である。荘厳なゴシック建築の描写からはじまるこの小説は墓地を舞台に怪奇現象が起こる中、主人公の報われない三角関係の恋が描かれるというゴシック・ロマンスであるが、その中に愛馬 Black Bess に乗ったディック・ターピンが登場し、陰鬱な物語にアウトローの捕物というアクションの要素を加えている。この小説のもつゴシック性と悲恋というモチーフは、「追剥」の雰囲気とストーリーに大きく影響を及ぼしていると言える。また、ターピンもデュバル同様、そのファッションが女性たちの心を掴んでいたとされるアウトローであった。

A cocked hat was placed in a very *dégagée* manner under his [Dick's] arm, and he held an ebony cane in his hand, very much in the style of a “*fashionable*,” as the French have it, of the present day.⁹

ノイズの描く追剥の出で立ちについても、フランス風の帽子など直接的な影響が見られる。1849年版の『ルックウッド』の「まえがき」において作者エインスワースは、次のような言葉を残している。

When a boy, I have often lingered by the side of the deep old road where this robbery [Dick Turpin] was committed, to cast wistful glances into its mysterious windings; and when night deepened the shadows of the trees, have urged my horse on his journey, from a vague apprehension of a visit from the ghostly highwayman.¹⁰

ノイズの言葉ではないかと疑うほど、「追剥」の持つ世界観に酷似している。エインスワースが少年時代に思い描いた亡霊のような追剥像は、まさにノイズ作品の終盤に登場する追剥と重なるのである。

ちなみにノイズはディック・ターピンやロビン・フッドを題材にして、2篇のバラッド詩を書いている。“The Ballad of Dick Turpin” (1928) は、いつものように追っ手を振り切ったターピンであったが、しかし己自身の良心（ドッベルゲンガーとして描かれる）からは逃れられないという、心理サスペンスの現代的なバラッド詩である。また、“Will Shakespeare's out like Robin Hood”

(1928) は、禁じられた鹿狩りをしたために故郷を追われたというシェイクスピアの逸話をモチーフにした作品である。鹿狩りの罪で捕えられたシェイクスピアが捕まえたのは、実は妖精の国のシカだったという超自然的な内容を、中世のロビン・フッド・バラッドの伝統的な形式で描いたパロディ・バラッド詩である。このようにノイズは、伝統的なアウトロー像に個性や新しい時代性をふんだんに盛り込むことによって、多岐にわたるアウトロー作品を書き残しており、「追剥」もまたその流れの中にあると考えることができる。

ノイズの描く追剥の恋人ベスは、次のように登場する。

Over the cobbles he clattered and clashed in the dark inn-yard.
He tapped with his whip on the shutters, but all was locked and barred.
He whistled a tune to the window, and who should be waiting there
But the landlord's black-eyed daughter,
 Bess, the landlord's daughter,
Plaiting a dark red love-knot into her long black hair. (Part 1, st. 3)

黒い瞳の娘ベスの名前は、『ルックウッド』ばかりでなく、19世紀のターピンものには必要不可欠なターピンの愛馬、ブラック・ベスが元になっていることに疑いの余地はない。次の引用は、1865年ごろ発表されアメリカで人気を博した“Poor Black Bess”という歌の一部である。

But fate darkens o'er me, despair is my lot,
The law does pursue me through a cock that I shot;
To save me, poor brute, thou didst do thy best,
Thou art worn out and weary, my poor Black Bess. (ll. 21-24)¹¹

雌馬ベスはターピンの危機には必ず現れ、この歌にうたわれているようにまさに恋人のような献身ぶりで彼を助ける。小説『ルックウッド』の中のベスもまた、ターピンの逃亡の際に活躍する。ターピンとベスは、ターピン自身が小説の中で ‘No couple more constant than I and Black Bess’¹² とうたうように、まるで人間の恋人同士のようなものである。センチメンタルを極めるベスの死の場面は、次のように描かれる。

“Hurrah!” shouted Dick; but his voice was hushed. Bess tottered—fell. There was a dreadful gasp—a parting moan—a snort; her eye gazed, for an instant, upon her master, with a dying glare; then grew glassy, rayless, fixed. A shiver ran through her frame. Her heart had burst “And art thou gone, Bess?” cried he [Dick], in a voice of agony, lifting up his courser's head, and kissing her lips, covered with blood-flecked foam.¹³

この愛馬ブラック・ベスの主人への命をかけた行為は、「追剥」の恋人ベスの詩の後半における行為と無関係ではない。後半の悲劇の伏線は、詩の引用6行目の‘love-knot’（恋結び）にも見られる。恋結びは伝承バラッドにたびたび登場する恋人たちの約束のモチーフであるが、これにノイズは‘dark red’という血の色を思わせる不吉な言葉を付しており、このあとに起こる血なまぐさい事件を読者に予兆させる。

追剥は恋人ベスに、「必ず戻ってくるから自分の姿を月明かりで探してほしい」という言葉を残してひと仕事しに出かけて行く。

He rose upright in the stirrups. He scarce could reach her hand,
But she loosened her hair in the casement. His face burnt like a brand
As the black cascade of perfume came tumbling over his breast;
And he kissed its waves in the moonlight,
 (Oh, sweet black waves in the moonlight!)
Then he tugged at his rein in the moonlight, and galloped away to the west. (Part 1, st. 6)

ジェロルドは、ノイズの詩には Dante Gabriel Rossetti (1828-82)、William Morris (1834-96)、Algernon Charles Swinburne (1837-1909) といったラファエル前派の詩や絵画の影響が見られると指摘しているが、¹⁴この6連目にも、ロセッティの“The Blessed Damozel”の天に召された乙女の髪が地上に残された恋人である男の顔にかかる、というイメージが影響を及ぼしていると思われる。

(To one, it is ten years of years.
 ... Yet now, and in this place,
Surely she leaned o'er me—her hair
 Fell all about my face. . . .
Nothing: the autumn-fall of leaves.
 The whole year sets apace.) (D. G. Rossetti, “The Blessed Damozel”, ll. 19-24)¹⁵

ノイズは“The Blessed Damozel”を、ロセッティの作品の中で最も美しい三作品のひとつであると認めている。¹⁶また、ノイズは自身の著書 *William Morris* の中で、モリスは‘pathos’を表現するという点においてシェイクスピアに匹敵すると高く評価しているが、¹⁷ノイズがモリスの作品の中でもとりわけ称賛する物語詩“The Haystack in the Floods”の中の恋人たちが引き離される場面は、「追剥」のこの連の表現に非常によく似ている。

His lips were firm; he tried once more
To touch her lips; she reach'd out, sore

And vain desire so tortured them,
The poor grey lips, and now the hem
Of his sleeve brush'd them. (W. Morris, "The Haystack in the Floods", ll. 132-36)¹⁸

囚われの身となった恋人たちが最後の口づけを交わそうとするが、体を拘束されていたために娘の唇が男の袖をかするだけであったという場面である。「追剥」でもベスが窓から垂らす髪が追剥に届くのみである。この別れの後に恋人たちには死が待ち受けているという展開もまた、この二つの連のイメージの重なりを裏付けていよう。余談ながら、3行目にはノイズご鼻眞の日本の絵画、墨絵の影響があると考えられる。ノイズは日本を舞台にした詩をいくつか書いているが、その中には「かけもの」(掛け軸)が度々登場する。¹⁹同じく3行目には、'perfume' という香りの感覚までが盛りこまれており、この連は作品中でも最も感性溢れるものとなっている。

追剥とベスの会話を、Tim というベスに横恋慕する男が聞いていた。次の連では、国王の兵士たちがベスのもとにやって来る。ティムが国王に知らせたために兵士がやってきたのだという背景については、まったく詩の中では触れられていない。不要な説明を省略するという、極めて伝承バラッド的な物語の展開だと言える。兵士たちはベスの体を縛り、その胸にライフルの銃口を突きつけ固定する。さらに兵士たちは窓の外に別のライフルを向け、追剥が戻ってくるのを待ち構える。

She twisted her hands behind her; but all the knots held good!
She writhed her hands till her fingers were wet with sweat or blood!
They stretched and strained in the darkness, and the hours crawled by like years,
Till, now, on the stroke of midnight,
Cold, on the stroke of midnight,
The tip of one finger touched it! The trigger at least was hers! (Part 1, st. 10)

1行目には、3連目に登場した 'love-knot' の 'knot' という単語が、皮肉な意味合いをおびて再び登場している。伝承バラッドの中ではおなじみの単語を同じ詩の中で異なる意味を込めて使用するという、ノイズの20世紀の詩人らしい現代的な感覚と工夫が伺える。また2行目は、伝承バラッドの中に度々登場する "wring fingers white" という悲しみを表現する常套句を彷彿とさせるが、ここでもノイズは「汗と血」というリアリスティックな表現を用いることで、現代的な臨場感を詩に与えている。

縛られたベスの耳に馬の蹄の音が聞こえてくる。

Tlot-tlot; tlot-tlot! Had they heard it? The horse-hoofs ringing clear;
Tlot-tlot, tlot-tlot, in the distance? Were they deaf that they did not hear? (Part 2, st. 6, ll. 1-2)

馬の蹄の音が、臨場感と焦燥感しょうそうかんとを盛り上げる。ベスは体をひねり、自分の胸に当てられたライ

フルの引き金を引き、その銃声で恋人に危険を知らせる。その音を聞いた追剥は危険を察知し来た道に戻るが町で恋人が死んだことを知り、怒り狂い戻ってきたところを待ち構えていた兵士たちによって撃ち殺される。恋人たちの死が描かれる伝承バラッドは数多くある。彼らは死後植物に姿を変え、あるいは肉体を持った亡霊となり、再会を果たす。ノイズのバラッド詩の面白さの一つは、そんな恋人たちの死後の再会を描いた最後の2連にあると言える。

*And still of a winter's night, they say, when the wind is in the trees,
When the moon is a ghostly galleon tossed upon cloudy seas,
When the road is a ribbon of moonlight over the purple moor,
A highwayman comes riding —
Riding — riding —
A highwayman comes riding, up to the old inn-door.*

*Over the cobbles he clatters and clangs in the dark inn-yard.
He taps with his whip on the shutters, but all is locked and barred.
He whistles a tune to the window, and who should be waiting there
But the landlord's black-eyed daughter,
Bess, the landlord's daughter,
Plaiting a dark red love-knot into her long black hair. (Part 2, sts. 10 & 11)*

イタリックで表記された最後の2連は、この作品の第一部の1連目と3連目の一部を変化させ繰り返したものだが、1行目の‘they say’からの解るように、ここからは語り手にとっては不確かな話、つまり亡霊となった二人の再会の話になる。伝承バラッドの世界における死んだ恋人たちは肉体を持ったまま、当然のように再会を果たす。しかし、20世紀の詩人であるノイズの描く死後の再会は、このような不確かさ、曖昧さの中で描かれるのである。Michael Newtonは、英国における幽霊物語（‘Ghost Stories’）の全盛期は1880年から1914年ごろであると指摘しているが、²⁰「追剥」の発表はびたりとこの時期に重なっており、この点についても、ノイズは19世紀から続く文学の伝統の継承に携わったと言える。ノイズの描く死者たちは、中世以来うたい継がれてきた伝承バラッドの中の肉体を持った存在感のある死者たちとは明らかに異なり、曖昧な存在感を持つ19世紀的な亡霊である。尤も追剥とベスの再会の場面には身の毛がよだつ恐怖感はない。繰り返しという形式のもたらす安定感によって淡々と語られるこの最終部分は、まさにバラッド特有の恐怖感を生まないゴシズムの典型であるとも言えよう。²¹また、二人の再会の場面はすべて現在形で書かれているということにも注目したい。現在形で書かれることによって二人の再会は永遠のものとなる。ノイズの描く恋人たちの再会は、伝承バラッドにおいて死んだ恋人同士が植物に生まれ変わって結ばれるというお馴染みの結末を、現代人に非常に納得しやすい形に変奏したものであると言える。

このように、ノイズのバラッド詩は、イギリスの詩の歴史の中で大きな流れを築いてきたゴシッ

クとアウトローという二つのジャンルを融合し、さらに現代的な味付けを施した、独創的な想像力の産物であると言えるのである。

この魅力的なバラッド詩は、これまでに数多くのメディアに登場してきた。以下にその一部を紹介する。

1914	アメリカ人作曲家 Deems Taylor によるカンタータ 全米で公演
1933	イギリス人作曲家 C. Armstrong Gibbs によるコーラス
1951	映画 <i>The Highwayman</i>
1965	Phil Ochs のアルバム <i>Ain't Marching Anymore</i> に収録
1979	John Otway のアルバム <i>Where Did I Go Right</i> に収録
1981	Charles Keeping の挿絵による絵本出版 (OUP)
1985	テレビ映画 <i>Anne of Green Gables</i> に引用
1997	Loreena McKennitt のアルバム <i>The Book of Secrets</i> に収録
2002	小説 <i>The Highwayman</i> (Deborah Ballou)
2006~07	児童文学 <i>The Highwayman's Footsteps</i> and <i>The Highwayman's Curse</i> (Nicola Morgan)
2011	絵本 <i>The Highway Rat</i> (Julia Donaldson) 出版
2012	Charles Keeping の挿絵による絵本改訂版出版
?	映画 <i>The Highwayman</i> (starring Macleish Day and Marianne Page)

中でも、ロリーナ・マッケニットの美しい歌をBGMにした動画がYoutubeには数多く投稿されている。1986年のテレビドラマ『赤毛のアン』（日本では映画館で上映）では、16歳のアンが見事な詩の暗唱を披露するという場面で引用されている。原作にはない演出であり、「追剥」人気を証明する一つの証拠であろう。「追剥」自体を題材とした映画も制作されている。1951年、ノイズが71歳の時にハリウッドで映画化された *The Highwayman* は、詩の内容を82分に拡大したものである。ノイズは自伝 *Two Worlds for Memory* の中で当時の新聞記事について触れており、その際新聞に掲載された「追剥」のパロディを収録している（Appendix 参照）。これはスコットランド人 Ian Crawford なる人物の作品であると、ノイズは書き残している。全編にわたって、演劇用語や映画用語がふんだんに用いられたパロディである。

追剥はフェアバンクスのごとく馬を駆った もちろんドーランは塗り直して
 背景の絵がぐるぐると巻かれ 伝送写真が映し出される中
 足場には血のごとき赤^{せきしよく}色のアークライト BGM も高らかに
 やつらは追剥を待ち受けた

この場面 流れる音楽は極めて弱く

トマトジュースの上に倒れ込む追剥 スクリーンには「来週公開、乞うご期待」 (第7連)

残念なことに、このパロディに対するノイズのコメントは無い。また、インディーズではあるが、

現在製作中の映画もあり、その撮影状況はオフィシャル・サイトで見る事ができる (<http://www.thehighwaymanmovie.com/index.html>)。

ジェロルドは「追剥」について、次のように書いている。

The Highwayman has not only made the most popular appeal of all his ballads, but has been described by a competent critic as being the best narrative poem in existence for oral delivery—it even “gets across” through the lips of an indifferent reciter.²²

「無意識に、口をついて出てくるバラッド」という評価は、バラッド詩人冥利につきる言葉であろう。伝承バラッドの伝統的な手法、19世紀のバラッド詩の流れ、そして現代的な感覚とを巧みに織り交ぜて描くノイズのゴシック・アウトロー・バラッドは、今日この日にも様々なメディアによって再生し続けている、まさに生きたバラッド詩であると言える。

注

本論は、平成25年に日本バラッド協会第5回会合において「英国バラッド詩、10分の1の魅力—*The Nation's Favourite Poems*におけるバラッド詩の位置づけ～Alfred Noyesを中心に～」のタイトルで行った特別講演の内容の一部に加筆・修正したものである。

1. *The Independent* 誌 (October 1995) には、‘After six days of voting the people’s choice, with more than double the votes of its nearest rival, turned out to be Rudyard Kipling’s *If* - admittedly redolent of the former O-Level syllabus, but the work of a Nobel laureate none the less. The rest of the Top 10, however, turned up some surprises.’ という記事が掲載された。また、留守番電話に詩人名や作品名を残すという投票であったため、‘Ozzy Mandias’ や ‘Allergy in a Country Churchyard’ といった録音も残されていたという。
2. <https://www.youtube.com/watch?v=bCtJDbQwsZ4> や <https://www.youtube.com/watch?v=IInoIB1VILU> <https://www.youtube.com/watch?v=J43yq-NRpQo> など参照。小学生の朗読と絵で作品を紹介した動画については <https://www.youtube.com/watch?v=gq6dNQiXYtA> や <https://www.youtube.com/watch?v=j4nbs9HbeAo> など。
3. Robert Huntington Fletcher, *A History of English Literature* (HardPress Publishing, 2010) 330.
4. Walter Jerrold, *Alfred Noyes* (London, 1930) 85.
5. 以下、ノイズの詩作品からの引用は全て *Collected Poems Volume One and Two* (Kindle, 2011) に拠る。
6. テニソンの詩作品からの引用は全て Christopher Ricks ed., *Tennyson: A Selected Edition* (U of California Press, 1989) に依る。
7. *Alfred Noyes* 121.
8. Graham Seal, *The Outlaw Legend: A Cultural Tradition in Britain, America and Australia* (CUP, 1996) 52.
9. William Harrison Ainsworth, *Rookwood* (Kindle, 2012) 282.
10. *Rookwood* 23.
11. *The Outlaw Legend* 61.

12. *Rookwood* 409.
13. *Rookwood* 471.
14. cf. *Alfred Noyes* 120-21.
15. ロセッティの詩作品からの引用は全て *Dante Gabriel Rossetti; Poems & Translations 1850-1870* (London, 1926) による。
16. Alfred Noyes, *William Morris: English Men of Letters* (London, 1908) 16.
17. *William Morris* 67.
18. モリスの詩作品からの引用は全て *From The Defence of Guenevere and Other Poems* (London, 1916) に拠る。
19. たとえば、‘The Two Painters (A Tale of Old Japan)’ という、小泉八雲の『怪談』と似た作風の物語詩でも「かけもの」が重要なモチーフとして登場する。
20. There have of course always been stories about ghosts; however, the ‘ghost story’ itself, as understood by literary critics, is a Romantic invention. Its prime begins, tentatively, in the 1820s, hits its stride in the 1850s, reaches its zenith between the 1880s and the outbreak of the First World War, and peters out in the 1950s . . . (ed. and Intro. by Michael Newton, *The Penguin Book of Ghost Stories From Elizabeth Gaskell to Ambrose Bierce*, 2010, xvi).
21. Cf. 山中光義『バラッド詩学』（音羽書房鶴見書店、2009年）、59-62。
22. *Alfred Noyes*, 119-20.

A Select Bibliography

- Anon. *More Nation’s Favourite Poems*. BBC Books, 2007.
- _____. *The Nation’s Favourite Comic Poems: A Selection of Humorous Verse*. BBC Books, 1999.
- _____. *The Nation’s Favourite Love Poems*. BBC Books, 1997.
- _____. *The Nation’s Favourite Poems*. BBC Books, 1996.
- Ballou, Deborah. *The Highwayman: A Novel inspired by Alfred Noyes’ Poem*. 1st Books Library, 2002.
- Child, Francis James, ed. *The English and Scottish Popular Ballads*. Vol. II. Dover, 1965.
- Elson, William H. and Christine M. Keck. *Junior High School Literature . . .* Nabu Public Domain Reprints, 2010.
- Jones, Griff Rhys, ed. *The Nation’s Favourite Twentieth Century Poems*. BBC Books, 2008.
- Morgan, Nicola. *The Highwayman’s Footsteps*. Kindle, 2012.
- Noyes, Alfred. *Collected Poems Volume One*. Kindle, 2011.
- _____. *Collected Poems Volume Two*. Kindle, 2011.
- _____. *The Flower of Old Japan, and Other Poems*. Ulan Press, 2012.
- _____. *The Lord of Misrule and Other Poems*. Kindle, 2011.
- _____. *The New Morning Poems*. Kindle, 2013.
- _____. *Sherwood: Robin Hood and the Three Kings*. Kindle, 2012.
- _____. and Charles Keeping (illustration) *The Highwayman*. OUP, 1981.
- _____. *Two Worlds for Memory*. Philadelphia, 1953.
- Snodgrass, Mary Ellen. *Encyclopedia of Gothic Literature*. Facts on File, 2005.
- Spark, Muriel. *John Masefield*. PMLICO, 1953.
- Turpin, Richard. *The Trial of the Notorious Highwayman Richard Turpin, at York Assizes, on the 22d Day*

of March, 1739, Before the Hon. Sir William Chapple. Gale Ecco, Print Editions, 2010.
Warwick, Alex, ed. *The Nation's Favourite Children's Poems.* BBC Books, 2007.

Appendix

"Hollywood Highwayman"

The wind was a twenty-foot fan, sirs, blowing a gusty breeze,
The moon was a baby floodlight greening the Hollywood trees,
The road was a painted backdrop, so was the purple moor,
And the highwayman came riding —
 Riding — riding —
The highwayman came riding, up to the sound-set door.

Over the cobbles he clattered (noise off by cocoanut shells)
His Wonder Horse was stamping, in the background were the belles,
He crooned a blues to the window, and who should be waiting there?
Black Bess, the landlord's daughter
 (Renamed Nell, a colonel's daughter)
Plaiting a Technicolour love-knot into her bottle-blonde hair.

"One kiss, my bonny sweetheart. Gee! That's the way I feel,
But I shall be back with the crown jewels before the end of the reel
And if they fade me early or dissolve me through the day,
Then look for me by limelight,
 (5,000 watts of limelight)
I'll come to thee by limelight, though Karloff bars the way."

He did not come in the Third Reel; he did not come in Four,
They switched on reds for sunset, with Nell posed at the door.
Then, with the theme-song blaring, the camera tracking before
A Red-Coat troop came marching —
 Marching — marching —
The extras all came marching with a chorus (and encore).

There's comedy with the landlord (with gags about being a "red")
They also "gagged" his daughter — and tied her to the bed.
Two of them knelt at the casement, with six-guns at their side,
There was a fade-in to the window,
 The gunman at that window
And Nell could see, on the backcloth, the road that *he* would ride.

Tlot-tlot, in the frosty silence — a clever long-range shot.

Nearer he came and nearer, her face picked out by a spot.
Her eyes grew wide in a close-up, the mike picked up a breath,
Then her finger moved in the darkness,
 A gun-flash shattered the darkness,
Shattered her breast (and a call-boy) but warned him with her death.

Back he rode like Fairbanks, his grease-paint just renewed,
The tarmac unreeling behind him and the telephoto viewed.
Blood-red were the klieg lights on the scaffold, the music rose to a peak,
Then they ambushed him on the highway,
 (Pianissimo for the highway)
He lay in tomato-juice on the highway as the screen slashed "All Next Week."

*And still of a winter's night, they say, when the wind is in the trees,
When the moon is a ghostly galleon tossed upon cloudy seas,
When the road is a ribbon of moonlight — and sighs breathe o'er the air
Comes Hollywood's "Turpin" riding
 Riding — riding —
Comes Louis Hayward riding, on his Metro-Goldwyn-Mayer.*

(Quoted in *Two Worlds for Memory*)

(みやはら まきこ：英語学科 准教授)